

⑤ 米子市の取組

1. 研究の仮説

仮説1

ルールやマナーの遵守、フェアプレイ等の運動のもつ内在的な価値を大切にしながら、運動の特性を十分に味わうことで、運動の楽しさに浸ることができる子どもを育成していくことができるであろう。

仮説2

運動やスポーツにおいて自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連づけながら、より良い人間関係を築く力や、伝える相手や状況に応じて学習したことをわかりやすく相手に伝えるコミュニケーション能力を養うことで豊かに関わり合える子どもを育成することができるであろう。

仮説3

運動や健康に関する課題を見付け、粘り強く意欲的に課題に取り組むとともに、自らの学習活動を振り返りつつ、課題を修正することで、新たな課題を追究する子どもを育成することができるであろう。

2. 米子市の取り組み

- (1) 全領域での研究推進
- (2) 運動の楽しさに迫るための「類似の運動(アナログン)」「易しいゲーム」「簡素化されたゲーム」の追求
- (3) 各領域での体育の見方・考え方「する、見る、支える、知る」の蓄積

3. 取り組みの実際

○研究授業の実施

(1) 授業研究会

【陸上運動領域】

石田 康介 先生(五千石小)「チームジャンプ めざせ世界新記録」(5年:走り幅跳び)

【保健領域】

遠藤 正裕 先生(弓ヶ浜小)「病気予防のセルフマネージャーになろう」(6年:病気の予防)

【ゲーム領域】

荒金 圭太 先生(淀江小)「みんなで開こう淀江カップ」(3年:ラインサッカー)

(2) 理論研修会

1月8日(金)リモート研修

講師 鳥取県教育委員会体育保健課 綱本 大介 指導主事

「今後の体育学習の在り方」

- ・易しいゲームと簡易化されたゲームについて
- ・体育科の見方・考え方について

(3) 実践研究収録「飛翔」の作成 ※来年度初めに発刊予定

実践事例①【「わたしたちの体育」を活用した実践】

「チームジャンプ めざせ世界新記録」の実践を通して

米子市立五千石小学校 石田 康介

1 はじめに

走り幅跳びは、リズムカルな助走から力強く踏み切って遠くに跳ぶ楽しさや喜びがある運動である。助走、踏み切り、空中、着地の4局面に分けることができ、助走では高い助走速度を保ったまま、踏み切り前の準備局面をリズムカルに走ること、踏み切りでは決められた踏切位置でななめ上に鋭く跳び出すこと、着地では足を曲げながら両足で着地することが大切な運動である。

今回は、核となる学習内容に迫るための類似の運動の設定を行うことと単元における「する・みる・支える・知る」の視点を明らかにして指導を行うことにより、子どもたちにとってわかる、できる体育になると考え、実践を行った。

2 取り組みの実際

(1) 類似の運動 (アナログン)

走り幅跳びの構造的特性から核となる学習内容を考えた。それらを身につけるために、どのような動きに視点を与えるか意識して、類似の運動を単元計画に設定した。授業では、類似の運動に取り組む中で、動きのコツを見つけるために、お互いの動きを見合ったり、よかった点や改善点を伝え合ったりした。スモールステップで動きを習得することができ、多くの児童が動きのコツを掴むことができていた。具体的な類似の運動の例は表1に示している。

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---|---|---|----------|--|------------------------------|--|
| 主なねらい | 学習の進め方を理解しよう。 | リズムカルな助走から力強く踏み切って、走り幅跳びをしよう。 | | | 自己の課題にあった方法で練習し、自己記録に挑戦する。 | |
| 核となる学習内容 | 学習のねらいと進め方 | 力強い踏切 | ひざを曲げた着地 | リズムカルな助走 | 自己の課題に適した解決方法の選択 自己記録への挑戦 | |
| 学習活動 (「わかる・できる・ためす」 /「いかす・チャレンジする」) | <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・準備の仕方、安全な活動の仕方 ・試しの跳び | <やってみよう> スキップ (普通→高) 片足踏切 立ち幅跳び ミニハードル ジャンプ | | | 9歩助走幅跳び | |
| | | 活動①【わかる・できる・ためす】 遠くに跳ぶコツをつかもう！ 力強く踏み切るコツをつかもう。 ・跳び箱踏切 ・踏切板踏切 | | 空中と着地のコツをつかもう。 ・跳び箱 ジャンプ ・タイヤ ジャンプ | | 活動②【いかす・チャレンジする】 「自分の課題にチャレンジし、記録を伸ばそう！」 課題別グループに分かれて、練習を行う。 ・記録計測 |
| 評価の計画 | | | ③ (観察) | ② (観察・ICT) | ① (ワークシート) | ① (ワークシート) |
| | ① (観察) | ② (観察) | ③ (観察) | | ④ (観察) | ② (観察) |

表1 「類似の運動とねらい」

| | 類似の運動 | 場、動きの説明 | 運動のねらい |
|----------|---------------|------------------|--|
| リズムカルな助走 | ミニハードル ジャンプ | ミニハードルを4m間隔で3台置く | 「タ、タ、タ、ターン」という踏切前のリズムアップの感覚を身につける |
| | リズムアップ走 | 5m間隔でミニコーンを3つ置く | コーンごとに徐々にリズムとスピードを上げるように助走し、リズムカルな助走を身につける |
| 力強い踏切 | スキップ (普通, 高い) | 20mの直線 | 2つの動きの違いに着目し、素早い振り上げ足や腕振りの感覚を身につける |
| | 跳び箱踏切 | 踏切位置に跳び箱 | 地面を力強く踏む感覚と振り上げ足を素早く振り上げる動きを身につける |
| | 踏切板踏切 | 踏切位置に踏切板 | 跳び箱同様に力強く踏む感覚と振り上げ足を素早く振り上げる動きを身につける |

| | | | |
|-------|-----------------|---------------------|------------------------------|
| 安全な着地 | 片足踏み切り 立ち幅跳び | 片足踏切から立ち幅跳びをして、着地する | 着地時に両足を揃え、足を前に投げ出す動きを身につける |
| | 跳び箱ジャンプ | 跳び箱の上から片足で踏み切り着地する | タイミングよく両膝を曲げ、安全に着地する動きを身につける |
| | タイヤジャンプ | タイヤの上から片足で踏み切り着地する | タイミングよく両膝を曲げ、安全に着地する動きを身につける |

(2) 単元における「する・みる・支える・知る」の視点

体育学習を通して、児童には生涯にわたって、ライフステージに合わせた多様な運動・スポーツの楽しみ方をする中で、運動に親しみ、心身の健康の保持増進を図ったり、他者や地域とのつながりを持ち、スポーツを介してコミュニティを形成したりするスポーツライフの実現をしてほしいと考えている。そのために本単元で働かせて欲しい見方・考え方を以下のように考えた。



類似の運動「ミニハードルジャンプ」

「する」…リズムカルな助走から力強く踏み切り、安全な着地をすることができる児童が増えた。動きの向上に伴って、記録の向上も見られている。また、わたしたちの体育に書かれている運動のポイントを意識して、自分の体を意図した通りに動かそうと工夫している児童の姿も見られた。

「みる」…今回の学習はチームを組み、お互いの記録を伸ばすためにアドバイスをする活動を行なった。友達の動きを見たり、ICT 機器を用いて、自分の動きを確認したりしてよりよい動きを目指して活動することができた。

「支える」…走り幅跳びの準備片付けを行ったり、安全な場を作ったりすることができた。また、チーム全員で目標記録を達成しようという課題を設定していたため、少しでも記録が伸びたことをみんなで喜ぶ姿が見られ、サポーターとしての関わりをすることができた。

「知る」…走り幅跳びの世界記録（8m95cm）をテープで示したり、跳躍の動画を見たりすることで、どうしたらあんなに跳べるのだろうと走り幅跳びについて興味を高めることができた。また、ハードルや走り高跳びと共通する踏切前の動きがあるなど体の動かし方についても知ることができた。



友達の動きを手拍子で支える児童

3 成果と課題（○成果、△課題）

○運動の構造的特性から類似の動きを考え、焦点化することによって、スモールステップを踏みながら技能の習得を図ることができ、児童の技能習得、記録向上にも効果があった。

○指導者が見方・考え方の視点を持って取り組むことにより、児童への指導や支援がより明確かつ具体的なイメージを持って行うことができた。

△見方・考え方が児童にどのように培われているのか判断することは難しい。学習のオリエンテーションで児童に提示することで、意識して見方・考え方を働かせることができると感じた。また、様々な領域で提示したり、価値づけたりすることで、共通する見方・考え方があることにも気付くことができると考える。

実践事例②【「わたしたちの体育」を活用した実践】

みんなで開こう淀江カップ

米子市立淀江小学校 荒金 圭太

1. はじめに

ゲーム領域は、規則を工夫したり作戦を選んだり、集団対集団で友達と力を合わせて競い合ったりする楽しさや喜びに触れることができる運動である。低学年のゲームの学習を踏まえ、中学年では、ゲームの楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすることができるようにし、高学年のボール運動の学習につなげていくことが求められる。

今回の実践では、「わたしたちの体育」の場の設定や用具の工夫を活用し、友だちとアドバイスし合ったり、作戦を立てたりしながら学習することで、効果的に動きの質を高めることができると考え実践していった。

2. 指導の実際

(1) 単元の計画

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 (本時) | 8 | |
|---|--------------------------|-------------------------------------|-------------|--------------------------------|---------------|---------|--------|-------|--|
| 【いかす・チャレンジする】 学習活動（【わかる・できる・ためす】） ／ | ・オリエンテーション ・ウォーミングアップ | サーキット ・ボールタッチ ・しっぽとり ・ドリブル | | サーキット ・ボールタッチ ・スピードパスゲーム | | | | | |
| | | ・場の設定 ・前時の学習を振り返る。 | | | | | | | |
| | | スピードパスゲーム | ドリブル通り抜けゲーム | スピードパスゲーム | ドリブル通り抜けゲーム | グリッドゲーム | | 淀江カップ | |
| | | | | | グリッドゲーム (ハーフ) | | | | |
| 学習の振り返り | | | | | | | | | |

(2) 指導の工夫

○用具の設定

新聞紙を丸めたボールを使用し、ボールに対して恐怖心を持っている子も安心して活動できるようにする。また、ボール操作も易しくなるので、積極的に活動に取り組めるようにする。

○場の設定

攻めと守りの場所が決まっているグリッドゲームで、身体接触が恐く、積極的にゲームに参加できない子どもでも取り組みやすいようにする。

3. 成果 (○) と課題 (●)

○新聞紙ボールは教具としてとても良かった。

→柔らかく、足で止めやすいので、体をボールに近づけるだけで足元に収めることができていた。

→低学年から段階的に取り入れていくことで、中学年ではゴムボールの使用も容易になると考える。

●「わたしたちの体育」のグリッドゲームはドリブルで通り抜けることを想定している。パスの技能を意識するのであれば、グリッドをもう少し広くし、パスの受け手が大きく動けるようにすれば良かったのではないかな。

●守備側グリッドを、2回パスを通して得点を競っていたが、止められた場合最初に戻るルールだったので、最初の児童が蹴る場面が多かった。多くの児童に機会を設けるためには、ローテーションしても良かったのではないかな。

